

## F-2 日本語の格助詞と副助詞・係助詞との語順の, Nanosyntax による記述

林 則序 (東京大学)\*

### 概要

副助詞・係助詞<sup>1</sup>と格助詞との語順に, ある種の制約があることは, [山田 1936] 以来よく知られていることである。本発表では, それぞれの助詞について豊かな階層を想定し, それらの複雑な相互作用を, Nanosyntax を用いて記述することを試みた。この結果, [青柳 2006] が正しく記述するものに加えて, 副助詞・係助詞の 2 分法に収まらないような場合についても正しく記述することができた。日本語の記述の観点からは, まず, 単なるレキシコン上の個々の指定でなく, 階層性そのものを用いた記述を可能にした。また, 副助詞・係助詞と格助詞との語順だけでなく, 副助詞・係助詞自体の語順や, とりたて作用のフォーカスやスコープの広がり限界や, 構文の副助詞・係助詞の選択の仕方 [茂木 2000, 茂木 2001, 茂木 2008] などの現象も含めて, 統一的な記述のプラットフォームを提供することができた。Nanosyntax の観点からは, 本発表は, Spellout 駆動移動以外にも, 伝統的な意味での指定部への移動が, 語の内部レベルで必要であることのもう 1 つの実例を提供することになる。

### 1 2つの階層

副助詞・係助詞と, 格助詞<sup>2</sup>との語順に制約があることは, [山田 1936] をはじめとして, よく指摘されている。<sup>3</sup> 例えば, 「だけ」は, 格助詞「が」の左にしか出現できないが, 他の格助詞の左右両方に出現することができる (以下, d. は場所の, e. は道具の「で」格である)。<sup>4 \*5 \*6</sup>

- (1) a. 太郎 { だけが, \*がだけ, だけ } 来た。  
b. 花子は太郎 { だけを, ?をだけ, だけ } 褒めた。  
c. 花子は太郎 { だけに, にだけ, \*?だけ } 本を与えた。  
d. 太郎は, 東京 { だけで, でだけ, #だけ } フィールドワークを行った。  
e. このガラスは, ハンマー { だけで, でだけ, \*だけ } 割ることができる。  
f. 花子は太郎 { だけから, ?からだけ, \*だけ } 賄賂をもらった。

「さえ」は, 格助詞「が」の左にしか出現できない。他方, 格助詞「を」と「に」に関しては, 「さえ」はそれらの両側に現れることができる。その他の格助詞に関しては, その右にのみ出現することができる。<sup>7</sup>

- (2) a. 太郎 { ?さえが, \*がさえ, さえ } 来た。  
b. 花子は太郎 { さえを, ??をさえ, さえ } 褒めた。  
c. 花子は太郎 { ??さえに, にさえ, \*?さえ } 本を与えた。  
d. 太郎は, 東京 { \*さえで, でさえ, #さえ } フィールドワークを行った。  
e. このガラスは, ハンマー { \*さえで, でさえ, \*さえ } 割ることができる。  
f. 花子は太郎 { ??~\*?さえから, ?からさえ, \*さえ } 賄賂をもらった。

「も」は, 格助詞「が」の左にのみ出現できる。その他の格助詞の場合は, その右にのみ出現できる。

- (3) a. 太郎 { ?もが, \*がも, も } 来た。

\*hayashi@phiz.c.u-tokyo.ac.jp, <https://www.hayashi-lin.net/>

\*1 本発表においては, 副助詞・係助詞は, 慣習的な意味でのみ用い, 厳密に定義される理論的な用語としては扱わない (理論的な立場を持つのは, カートグラフィー (7) のほうになる)。また, 「とりたて詞」という語は本発表では用いていないが, 何かの含意があるわけではない。

\*2 属格の「の」は, それが用いられるのが名詞的な環境であるため, 本発表では検討しない。

\*3 「に」格に様々な種類があり, 統語的な振る舞いが一様ではないことは [Sadakane & Koizumi 1995] が指摘している通りだが, 本発表では詳しく議論しないことにする。

\*4 容認性判断は, 注記のない限り, 発表者によるものである。\*がつくものは, 容認が難しいもので, その難しさが, 文法から排除すべきであるほどであるものである。#がつくものは, 意図した読みでは\*であるものであるが, 他の解釈であれば異なる判断になるものである。

\*5 本発表では, 格標識が随意的になくすることができる場合については, 単なる随意的な case dropping だと便宜的に扱うことにする。格標識が義務的になくする (例: 「太郎 (\*が) しか (\*が)」「太郎 (\*が) は (\*が)」) 場合はこれには該当しない。

\*6 (1d) の「だけ」だけの例が容認可能であるのは, 「を」格の省略があるからだと考えられる。すなわち, 以下の文が元になっていると考える。

- (i) 太郎は, 東京 { の, ??を } フィールドワークを行った。

以下同様。

\*7 「から」格に対する制約は, 「で」格と比べて少し弱くあり, 特異的である。

- b. 花子は太郎 { \*もを, をも, も } 褒めた。  
 c. 花子は太郎 { \*もに, にも, \*?も } 本を与えた。  
 d. 太郎は, 東京 { \*もで, でも, #も } フィールドワークを行った。  
 e. このガラスは, ハンマー { \*もで, でも, \*も } 割ることができる。  
 f. 花子は太郎 { \*?もから, からも, \*も } 賄賂をもらった。

他の副助詞・係助詞についても同様の観察ができる。反復の「ばかり」と意外の「まで」は「だけ」と同じ振る舞いをする。「しか」「は」は「も」とほぼ同じであるが、主格「が」との共起が全く許されないのが違いである。

以上のような観察を行うと、格助詞について1つの、副助詞・係助詞についてももう1つの、階層が想定できる：

- (4) a. 格助詞の階層：が|を, に|で (場所), で (道具), から

「が」 副助詞と係助詞の一部（「まで」「さえ」「も」）について、その右に出現できる。<sup>\*8</sup>

「を」「に」 副助詞と、係助詞の一部（「まで」「さえ」）について、左右両方に出現できる。他の係助詞（「も」「は」「しか」）については、左にのみ出現できる。

その他 副助詞（「だけ」「ばかり」）の左右に出て来れるが、係助詞については、左にのみ出現できる。

- b. 副助詞・係助詞の階層：だけ, ばかり, まで|さえ|も|は, しか

「だけ」「ばかり」「まで」 「が」格はその右に出現でき、その他の格については、その左右に持つことができる。

「さえ」 「が」格はその右に出現できる。「を」「に」格については、その左右両方に出現できる。「で」「から」格については、その左にのみ出現できる。

「も」 「が」格はその右に出現でき、その他の格については、その左にのみ持つことができる。<sup>\*9</sup>

「は」「しか」 「が」格と共起できないのを除いて、「も」と同様。

これらの階層は、互いに関係しあっており、独立のものではない。それぞれの階層の特徴づけにおいては、もう一方の階層を、その順序に沿った形で参照しているのである。また、これらの階層は、それぞれ既に以前より提案されているものである。格階層については、通言語的には、[Blake 2001]の提案などがある。日本語の格についての[Marantz 2000]的理論[青柳 2006]もまた、(派生におけるタイミングの違いによる)ある種の階層と見なすことができる。副助詞・係助詞の階層を、異なる様々な観点から提案する先行研究は少なくない(現代語に限れば、[野田 1995, 茂木 2000, 茂木 2001, 宮地 2007, 田中 2016]など)。

## 2 先行研究

上で挙げた(1-3)の現象は、すでに[青柳 2006]が記述しているところである。[青柳 2006]は、まず、副助詞を名詞的、係助詞を非名詞的な接辞的付加詞とする。形態論的な段階([Fukui & Takano 1998]のDemergeの段階)においては、格助詞は、その左に名詞的な形態素があることを要求する(選択する)。このことにより、係助詞(名詞的ではない)の後ろに格助詞が続くことが排除される(例：「\*しかを」)。さらに、[Marantz 2000]の形態格理論を利用し、格助詞の、統語木への挿入のタイミングを調整することで、「が」格の、副助詞・係助詞に対する特別な拒絶も正しく記述される。

しかし、この理論は2つの点で批判可能である。まず、経験的な問題として「もが」がある。[青柳 2006]は、以下のように、「も」と「が」は共起しないものである、と観察する：<sup>\*10</sup>

- (5) \*本がも ; \*本もが [青柳 2006, 52, (3a, c)]

[青柳 2006]は、「\*NPもが」の排除の仕組みとして、「が」が[Marantz 2000]のデフォルト格であり、副助詞・係助詞がある場合においては挿入される必要がない(なので、挿入されない)ことを提案している。これは実際、正しい。

<sup>\*8</sup> ここでいう副助詞は、「だけ」「ばかり」のことで、係助詞は、「まで」「さえ」「も」「は」「しか」のことである。ただし、本発表では、副助詞・係助詞についての2分法的な立場は取らない。副助詞や係助詞という用語は、あくまでも便宜的なものである。

<sup>\*9</sup> 「だれも」が反例である(例：「だれもを」「??~\*だれもから」)ことは認めざるを得ないが、本発表では、それを「だれも」の語彙的な性質であるとして無視する。(cf. [青柳 2006, 109, fn. 6])

<sup>\*10</sup> この容認性判断は、[青柳 2006]による。

一方で、「\*NP もが」が「容認不可」であるのは、「も」が係助詞であり、そのために名詞性がなく、「が」がそれを形態的に選択しないからだ、としている。しかし、上の例 (3a) に加えて、以下のような実例 (6) が反例になる：

(6) 西表島に遊びに来る学生たちもが、川満スーパーのトイレトペーパーに手が伸びる\*<sup>11</sup> \*<sup>12</sup>

より大局的な観点からすれば、副助詞・係助詞の2分法は、他の様々な現象を包括的に記述するためにはそもそも限界がある。特に、「まで」は、副助詞と係助詞の境界にあり、格助詞との順序以外の様々な現象においても、その立ち位置が揺れている：とりたて作用のフォーカスの上限 [青柳 2006, 130]、とりたて作用のスコープの下限 [茂木 2000, 56]、非名詞性 [沼田 2009, §2.2.4] [茂木 2001, 67] [茂木 2008, 179, (12)] \*<sup>13</sup>、副詞とのスクランプリング [Yanagida 1999, 26, (16, 17)]。さらに、この境界的な振る舞いは、階層 (4b) に反しない形で位置づけることができる。すなわち、その位置づけにおいて、階層が一本の線で済んでしまうのである。また、このような階層上の複雑な振る舞いは、2分法ではなく、より微妙な表現を要求する。さらに、格助詞との順番の関係や、構文の選択、スクランプリング、意味的な振る舞いがあることを考えると、統語論と意味論の双方において利用可能な、何かしらの階層の表示があるのが望ましい。

### 3 Nanosyntax

Nanosyntax [Starke 2009, Caha 2009, Caha 2011] や、それが前提とするカートグラフィー ([Rizzi 1997] など) は、試してみる価値のある1つのアプローチである。Nanosyntax は、分散形態論 ([Halle & Marantz 1993] など) と同じように、反語彙主義的であると言われているような形態理論である。すなわち、統語論とは異なる合成原理を拒否し、かつ、音形の決定は統語構造に依存して決まる。

Nanosyntax の派生の機序は ([Caha 2011, Baunaz & Lander 2018] のバージョンでは) 次の通りである。

- 語彙項目は、音形の情報と、意味情報に加えて、(統語範疇でも、素性の束でもなく) 統語木の断片 (L-tree と呼ばれる) からなる3つ組である。
- 派生においては、主要部 (や指定部など) の Merge が行われる。Merge ごとに、直ちに、統語木 (S-tree と呼ばれる) と語彙項目たちの L-tree とのマッチングが行われ、それが成功したときに Spellout がなされる。主要部  $h$  と補部  $C$  とが Merge されるとき、次に挙げるマッチングの規則が、この順番の優先度で適用される：<sup>14</sup> \*<sup>15</sup>
  - STAY : S-tree [[ $h$ ] [ $C$ ]] 全体とマッチする語彙項目の木があるとき、その語彙項目1つを用いて Spellout がなされる。
  - CYCLIC : 補部  $C$  の指定部に、(以前の Spellout 駆動移動で生じた) 句  $S$  があるとき、それを除いた木  $C-S$  と  $h$  による木、すなわち、[[ $h$ ] [ $C-S$ ]] にマッチする L-tree を持つ語彙項目があるとき、その語彙項目を用いて Spellout がなされ、 $S$  は  $h$  の指定部に、Spellout 駆動移動をする。
  - SNOWBALL : 主要部  $h$  のみからなる L-tree を持つ語彙項目があるとき、その語彙項目を用いて Spellout がなされ、 $C$  は  $h$  の指定部に、Spellout 駆動移動をする (結果的に、主要部後置になる)。
  - PREFIX : 主要部  $h$  のみからなる L-tree を持つ語彙項目があり、(このような規則を用いよ、という語彙的な指定があるとき)、その語彙項目を用いて Spellout がなされ、 $C$  は  $h$  の補部に留まる (結果的に、主要部前置になる)。

Spellout 駆動移動と、従来の、一般的な Minimalist Syntax での指定部への移動は、区別される必要がある。

\*<sup>11</sup> <http://www.blueseason-i.com/36043/>

\*<sup>12</sup> ただし、このときの「学生たちもが」の「も」、あるいはあらゆる「NP もが」は、単なる累加ではなく、必ず、[沼田 2009] の「意外」用法になるように思われる。この制限については、本発表は深く追究しないが、[青柳 2006] の反例をなすことには間違いはない。

\*<sup>13</sup> 非名詞の一般的な性質については、[宮地 2007, 32-34] も見よ。

\*<sup>14</sup> 規則の名前は、[Baunaz & Lander 2018] に従った。

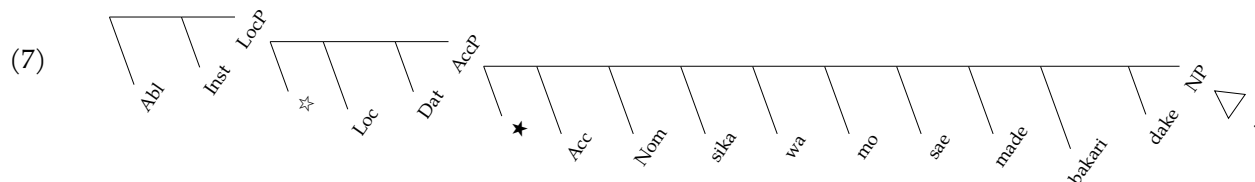
\*<sup>15</sup> 異なる LF をもつ L-tree のノードは、マッチにおいては比較の対象にならないことにする。(要するに、マッチにおいては、範疇だけではなく、ノードの中身もマッチの対象となる。本発表ではこのような簡略な扱いをしているが、実際は、「ポインタ」の概念を用いて、それらの区別を行う)。

また、以前の Spellout は、後の Spellout によって上書きされうる (Cyclic Override).

- S-tree に当てはめるときの L-tree は、底さえ揃っていれば、上部に余りが生じてもよい (Superset Principle).  
これが、形態的パラダイムにおける融合 (syncretism) を生じさせる. なお、余りが多い語彙項目と少ない語彙項目とがあるとき、少ないほうが優先して選ばれる (Elsewhere Principle).

#### 4 記述の技術

今回の発表のためのカートグラフィー、すなわち、名詞句、格と副助詞・係助詞のカートグラフィーを、以下のよう  
に仮定する. このうち、格の部分は、[Blake 2001] のものに従っている (ただし、属格はここでは関係ないので、  
抜いている). 副助詞・係助詞の部分は、[茂木 2000] のものにおおよそ従っている.



★のところには、bakariP から saeP までの大きさの句が、**Spellout 駆動でない伝統的な移動**をするものであるとする.  
☆のところには、bakariP から madeP までの大きさの句が、★に既に移動した句から、重ねて、伝統的な移動を  
するものとする. この仮定と、以下のレキシコンの想定とを合わせれば、日本語の格助詞と副助詞・係助詞との語  
順が正しく生成される.

助詞は、このカートグラフィー上の 1 点ではなく、**範囲**として (すなわち、L-tree として) 位置付けられる. カ  
ートグラフィー上の主要部の名前は、助詞そのものに結びつくものではなく、助詞の現れる統語的位置の目印であるに  
過ぎない.

次に、格助詞と副助詞・係助詞それぞれについて、語彙項目を指定する. 以下では、主要部 *a*  
と *b* について、右の L-tree を *a* ~ *b* と省略することにする. (*a* の姉妹がわざと空けられてい  
ることに注意! また、*a* と *b* の順番と L-tree 上の位置にも注意)

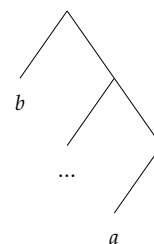


表 1: 日本語の副助詞・係助詞と格助詞についてのレキシコン

アイテム	PF	L-tree	LF	備考
名詞一般	(いろいろ)	sikaP △ ...	(いろいろ)	とりたての領域を含むとき、それらは全て恒等関数 (id)
だけ	/dake/	dake <sup>0</sup> ~ sika <sup>0</sup>	ONLY	bakari <sup>0</sup> より上は id
ばかり	/bakari/	bakari <sup>0</sup> ~ sika <sup>0</sup>	REPEATEDLY	made <sup>0</sup> より上は id
まで	/made/	made <sup>0</sup> ~ sika <sup>0</sup>	EVEN	sae <sup>0</sup> より上は id
さえ	/sae/	sae <sup>0</sup> ~ sika <sup>0</sup>	EVEN	mo <sup>0</sup> より上は id
も	/mo/	mo <sup>0</sup> ~ sika <sup>0</sup>	ALSO	wa <sup>0</sup> より上は id
は	/wa/	wa <sup>0</sup> ~ Nom <sup>0</sup>	CONTRAST	sika <sup>0</sup> より上は id
しか	/sika/	sika <sup>0</sup> ~ Nom <sup>0</sup>	ONLY	
が	/ga/	Nom <sup>0</sup> ~ Nom <sup>0</sup>	id	補部を Spellout 駆動移動させる (補部を左に取る).

を	/o/	Nom <sup>0</sup> ~ Acc <sup>0</sup>	id	ただし、これは補部を右に取る。 ただし、Acc <sup>0</sup> は、一般的に、NP から saeP の 適当なものをその指定部★に移動させる。
に	/ni/	Nom <sup>0</sup> ~ Dat <sup>0</sup>	id	
で (場所)	/de/	Nom <sup>0</sup> ~ Loc <sup>0</sup>	id	ただし、Loc <sup>0</sup> は、一般的に、NP から madeP の適当なものをその指定部☆に移動させる。
で (手段)	/de/	Nom <sup>0</sup> ~ Inst <sup>0</sup>	id	
から	/kara/	Nom <sup>0</sup> ~ Abl <sup>0</sup>	id	

このレキシコンがどのように生成をするのかを知るためには、「学生たちが」と「学生にも」の派生を試すのがよい。最終的な構造は、それぞれ、[[[学生たち] [も]] [が]] (Spellout 駆動移動の痕跡は省略している) と、[学生<sub>i</sub> ; [[に] [[も] [trace<sub>i</sub>]]]] (「に」「も」が主要部前置であることに注意) になる。

考えられる他の分析で、上手く行かないものについていくつか挙げておく。まず、次のような、副助詞・係助詞のカートグラフィーと、格助詞のカートグラフィーを互いに織り込まれる分析が考えられるが、これは上手く行かない。

#### (8) [Dat [Acc [mo [Nom [...]]]]]

これは、Nanosyntax の技術的な理由で、正しい生成をしない。「も」と「が」は別々に発音されうるので、Nom<sup>0</sup> を含む語彙項目と、mo<sup>0</sup> を底とする語彙項目が必要である。また、「も」と「を」も、別々に発音されうるので、Acc<sup>0</sup> を底とする語彙項目も必要である。対格付与のとき、「も」の L-tree が、Superset Principle により圧縮できることに注意すれば「をもが」が誤って生成されることが分かる。一般的に、副助詞・係助詞のカートグラフィーを格助詞のカートグラフィーで割ったとき、格助詞の Spellout も、2ヶ所に分かれてしまい、それらを制御することができなくなるのである。

日本語は(厳格な)主要部後置型の言語のように見える。一方で、Nanosyntax は、SNOWBALL で、(疑似的な)主要部後置性を提供する。格助詞と副助詞・係助詞の語順の記述においては、しかし、真の主要部前置性(すなわち、PREFIX 規則)と主要部後置性の混合を必要とし、さらに、(Spellout 駆動でない)移動を実際に必要とする。例えば、「NP もが」を基準にして、「NP にも」を導出するためには、以下の操作のいずれかが必要である：

1. 係助詞「も」の右方移動
2. 「に NP も」という語順のもとでの、NP の左方移動
3. 格助詞「に」が「NP-も」に tuck-in する

(他の操作の可能性もあるが、これよりも多くのステップを要するものばかりである)1 番目の右方移動は Nanosyntax で提供されていないばかりか、一般的な(日本語の)統語理論においても考え難いものである。2 番目については、レキシコン(表 1)に基づく Nanosyntax の派生がある。これは、実質的に 3 番目の tuck-in と同様の効果を持つだけでなく、主要部移動でなく句移動だけが生じていることが確実である([Cinque 2005] に準拠)。

## 5 意義

2 節でその必要性を述べたが、副助詞・係助詞の階層を、(格助詞の階層と合わせて)統語的に表現したことで、階層によって記述されることができる様々な現象について、統一的な、しかも、統語論と意味論の両方にとって参照可能な表示のもとでの記述が可能になる。

特に、格助詞との語順の現象は、上の 4 節の表 1 によって記述される。このうち、格助詞の(副助詞・係助詞に対する)階層性は、Acc<sup>0</sup> による移動の牽引★によってまさに表現されている。このような移動は、格助詞それぞれに対して指定されるのではなく、カートグラフィー(7)の一点に対して指定されている。従って、**階層性の指定は場当たり的ではない**のである。この点で、例えば、[竹沢 & Whitman 1998, §3.2] の記述よりも進歩していると言える。

分裂文や連体修飾などにおける選択現象は、まさに、当該の構文が、カートグラフィー (7) のどこを選択するか、を (1 点で) 指定することによって記述することができる。例えば、存在や所有の「A の B」構文は、A として、*dakeP* を選択するが、動名詞的な「A の B」構文は、A として (*dakeP* より大きい) *madeP* を選択する、と考えることができる (ただし、[Sells 1995] \*16)。

とりたて作用のフォーカス・スコープ一般の上限・下限については、階層性による違いがあることが報告されている [青柳 2006, 茂木 2000, 佐野 2007]。この違いは、実際は、カートグラフィー (7) 上で一貫性をもって現れるとは限らない。例えば、「だけ」と「しか」については、「だけ-しか」に対して「\*しか-だけ」であるが、これを [青柳 2006, 4 章] が提案するテストに適用しても期待通りの結果にはならない。しかし、部分的ではあるものの、(個別のとりたて作用に還元できないような) 階層性が一部見られるのは確かである。これについて、固定したカートグラフィー (7) がなくても説明はできるが、それがあつて、他の現象も含めた、包括的な記述が可能になる。具体的な記述方法の一つは、[Huang 1982, Hoji 1985] の (スコープ) 関係保存の制約をそのまま、LF 統語論の制約として受け入れる、というものである。もう一つの記述方法は、副助詞・係助詞のとりたて作用を、NP に追加される継続 (continuation; 言語学的な観点からは、[Barker & Shan 2014] などを参照) の積み重ねとして考える、というものである。例えば、(フォーカスとスコープが一致する、という単純な場合を考えて) 副助詞・係助詞について、次のような意味論のテンプレートを割り当てる： $\lambda f, \kappa, \eta. \eta(\lambda v. v(M(\kappa f)) :: (C // (A \setminus B)) \setminus ((D // (C \setminus D)) // (A \setminus B)))$  (ただし、 $M$  は、とりたて作用のことである) これは、再帰的 (recursive) な継続の積み重ねである。これと、VP 及び vP の段階での継続の解消の強制のメカニズムとを合わせれば、\*17 副助詞・係助詞のとりたて作用の適用は、階層 (7) が指定する順序の通りになる。\*18 また、階層に従っていないような例外となる副助詞・係助詞 (例えば、2 節の「しか」のフォーカスの上限) については、このテンプレートではなく、多層的 (multi-level) な継続の積み重ねと、unit 関数の自由な適用を用いればよい。

理論的な意義もある。4 節で検討したように、副助詞・係助詞と格助詞の語順を正しく生成するためには、Nanosyntax で想定されている Spellout 駆動移動以外にも、伝統的な、指定部への句の移動が望まれる。このような、何かしらの指定部への伝統的な移動は、標準的な Nanosyntax [Caha 2009, Baunaz & Lander 2018] では特に仮定されていないものではあるが、[Assmann 2014, 161] が case stacking 一般を記述するために、[Blix 2020, §5] がグルジア語の動詞屈折辞の形態素順を記述するために仮定している。本発表は、日本語をその先行研究の列に連ねるようになるものである。

## 6 今後の課題

Nanosyntax による記述 (あるいは、助詞を含む名詞句の内部に豊かな階層を想定するような理論全て) にとつては、まだ課題がいくつか残るが、このうち、解決が期待できるものもある。

副助詞・係助詞は、(9) のように、重複することがあるが、一般的に、このような、副助詞・係助詞の重複を許すかどうかは、直観の及ばない領域にあるように思われる。発表者にとっては、「だけ」の例 (9) は問題はなく、「さえ」についても可能だが、「も」については、非常に困難である (\*太郎もにも)。\*19

(9) (犯人は) その女だけとだけ会う (と言っています) [上山 2012, 233, (44)]

\*16 本発表では詳しく述べないが、[Sells 1995, §4.3] の問題を解決するためには、[Starke 2018, Caha in prep.] の workspace の概念を Nanosyntax に導入した上で、格助詞と副助詞・係助詞の両方を上から「見える」ようにすることで解決できる可能性がある。

\*17 具体的には、述語側で (もしくは、特定のフェーズで)、継続の解消 (lowering) を行うことである。そのまま導入することはできないが、[Charlow 2014] は参考になる。

\*18 [佐野 2007, 89] は、「さえ」が「も」と共起するとき、とりたて作用全体のスコープの振る舞いが、「も」に合わせて、「さえ」のほうについても拡張することを観察している。これをいかに再現するかについては、今後検討することにした。

\*19 「も」の重複についての実例については、WWW においては以下のような例が多く見つかるもの、これが意図していたものであるのか、単なる誤植なのかについては判然としない：

(ii) たしかに病氣やケガ、加齢で聞こえなくなることがある。そういう意味では、だれにも必要なんだね、手話は。

[http://www.ris.ac.jp/moraris\\_report/activity/2013/20140119\\_06.html](http://www.ris.ac.jp/moraris_report/activity/2013/20140119_06.html)

もしこれらの重複の例を生成する必要があるときは、カートグラフィー (7) のうち、適当な箇所を重複させればよい:  
(7') [...[sae2 [mo2 [...[dake2 [sae1 [mo1 [...[dake1 NP]]]]]]]]]]]]

このとき、★, ☆が sae1, mo1 などのみを牽引するようにすれば、「\*太郎にだけだけ」「\*太郎ももから」のような例が排除できる。

もう1つの問題は、格助詞の左側にある副助詞・係助詞と、右側にあるものとで、解釈の違いが生じる場合である。ある種のモダリティが文に現れているとき、「ハンマーだけで割れる」「ハンマーでだけ割れる」の例から分かるように、「だけ」のスキープのとり方にある種の傾向がある ([丹羽 1992, 上山 2012] など)。<sup>\*20</sup> この2つの「だけ」は、格助詞の左右の位置が異なり、それは★によって牽引されるかどうかの違いに還元される可能性がある。

3つ目の問題は、いくつかの副助詞・係助詞が、係助詞「は」と結合すると、その極性の振る舞いが変わる、という観察である [井戸 2016]。しかも、係助詞「は」が明示されていない場合でも、極性の振る舞いが異なるような場合もある。このことは、Nanosyntax における融合 (syncretism) の一つのケースとして考えることも可能かもしれない。

4つ目の問題は、階層性に従わない副助詞・係助詞の現象の扱い (例えば, [佐野 2009]) についてである。dake<sup>0</sup> などの主要部に、その補部の選択を (統語論上) 個別に指定させることで、階層性による含意関係を回避する方法が考えられる。

## 参考文献

- [青柳 2006] 青柳 宏. 2006. 『日本語の助詞と機能範疇』, ひつじ研究叢書 (言語編) 第 43 巻. ひつじ書房. [Assmann 2014] Assmann, Anke. 2014. "Case Stacking in Nanosyntax." In *Topics at InFL*, ed. by Anke Assmann, S. Bank, D. Georgi, T. Klein, P. Weisser, and E. Zimmermann, 153–96. Linguistische Arbeitsberichte 92. Leipzig: Universität Leipzig. [Barker & Shan 2014] Barker, Chris, and Chung Chieh Shan. 2014. *Continuations and Natural Language*. OUP. [Baunaz & Lander 2018] Baunaz, Lena, and Eric Lander. 2018. "Nanosyntax: The Basics." In *Exploring Nanosyntax*, ed. by Lena Baunaz, Karen De Clercq, Liliane Haegeman, and Eric Lander, 3–56. OUP. [Blake 2001] Blake, Barry J. 2001. *Case*. 2nd ed. Cambridge Textbooks in Linguistics. CUP. [Blix 2020] Blix, Hagen. 2020. "Spans in South Caucasian Agreement: Revisiting the Pieces of Inflection." *NLLT*. [Caha 2009] Caha, Pavel. 2009. "The Nanosyntax of Case." Diss., University of Tromsø. [Caha 2011] Caha, Pavel. 2011. "The Parameters of Case Marking and Spell out Driven Movement." *Ling. Variation Yearbook* 10 (1): 32–77. [Caha in prep.] Caha, Pavel. In prep. *Case Competition in Nanosyntax: A Study of Numeral Phrases in Ossetic and Russian*. *lingbuzz/004875*. [Charlow 2014] Charlow, Simon. 2014. "On the Semantics of Exceptional Scope." Diss., New York University. [Cinque 2005] Cinque, Guglielmo. 2005. "Deriving Greenberg's Universal 20 and Its Exceptions." *LI* 36 (3): 315–32. [Fukui & Takano 1998] Fukui, Naoki, and Yuji Takano. 1998. "Symmetry in Syntax: Merge and Demerge." *JEL* 7 (1): 27–86. [Halle & Marantz 1993] Halle, Morris, and Alec Marantz. 1993. "Distributed Morphology and the Pieces of Inflection." In *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 111–76. MIT Press. [Hoji 1985] Hoji, Hajime. 1985. "Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese." Diss., University of Washington. [Huang 1982] Huang, Cheng-Teh James. 1982. "Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar." Diss., MIT. [井戸 2016] 井戸 美里. 2016. とりたて詞の統語と意味から見る日本語否定極性表現の研究. 博士論文, 筑波大学. [Marantz 2000] Marantz, Alec. 2000. "Case and Licensing." In *Arguments and Case: Explaining Burzio's Generalization*, ed. by Eric Reuland, 11–30. *Linguistik Aktuell* 34. Amsterdam: John Benjamins. [宮地 2007] 宮地 朝子. 2007. 『日本語助詞シカに関わる構文構造史的の研究』, ひつじ研究叢書 (言語編) 47. ひつじ書房. [茂木 2000] 茂木 俊伸. 2000. とりたて詞の階層性について—動詞句及びスキープを手がかりとして—, 『国語学会 2000 年度秋季学会 要旨集』 54–61. [茂木 2001] 茂木 俊伸. 2001. とりたて詞の区分をめぐる. 『言語学論叢』 20, 61–83. 筑波大学一般・応用言語学研究室. [茂木 2008] 茂木 俊伸. 2008. とりたて詞の分類をめぐる. 『KLS 28』, 174–184. 関西言語学会. [丹羽 1992] 丹羽 哲也. 1992. 副助詞における程度と取り立て. 『人文研究』 44 (13), 93–128. 大阪市立大学文学部. [野田 1995] 野田 尚史. 1995. 文の階層構造からみた主題ととりたて. 益岡 隆志ら (編) 『日本語の主題と取り立て』 1–35. くろしお出版. [沼田 2009] 沼田 善子. 2009. 『現代日本語とりたて詞の研究』, ひつじ研究叢書 (言語編) 第 68 巻. ひつじ書房. [Rizzi 1997] Rizzi, Luigi. 1997. "The Fine Structure of the Left Periphery." In *Elements of Grammar: Handbook in Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281–337. Dordrecht: Kluwer. [佐野 2007] 佐野 まさき. 2007. とりたて詞の認可と最小性条件 — カラ節と主節との関係を中心に. 長谷川 信子 (編) 『日本語の主文現象 — 統語構造とモダリティ』, ひつじ研究叢書 (言語編) 第 56 巻. ひつじ書房. [佐野 2009] 佐野 まさき. 2009. とりたて詞と語彙範疇 — 述部焦点化構文からの事例研究 —. 由本 陽子, 岸本 秀樹 (編) 『語彙の意味と文法』, 349–372. くろしお出版. [Sadakane & Koizumi 1995] Sadakane, Kumi, and Masatoshi Koizumi. 1995. "On the Nature of the 'dative' Particle *ni* in Japanese." *Linguistics* 33 (1): 5–34. [Sells 1995] Sells, Peter. 1995. "Korean and Japanese Morphology from a Lexical Perspective." *LI* 26 (2): 277–325. [Starke 2009] Starke, Michal. 2009. "Nanosyntax: A Short Primer to a New Approach to Language." *Nordlyd* 36 (1): 1–6. [Starke 2018] Starke, Michal. 2018. "Complex Left Branches, Spellout, and Prefixes." In *Exploring Nanosyntax*, ed. by Lena Baunaz, Karen De Clercq, Liliane Haegeman, and Eric Lander, 239–49. OUP. [竹沢 & Whitman 1998] 竹沢 幸一, John Whitman. 1998. 『格と語順と統語構造』, 日英語比較選書 9, 中右 実 (編). 研究社. [田中 2016] 田中 秀和. 2016. とりたて詞のカートグラフィー. 『岡山大学文学部紀要』 66, 67–79. [上山 2012] 上山 あゆみ. 2012. ダケの解釈と AGRoP 分析再考. 大橋 浩ら (編) 『ことばとところの探求』, 221–234. 開拓社. [山田 1936] 山田 孝雄. 1936. 『日本文法学概論』. 法文館. [Yanagida 1999] Yanagida, Yuko. 1996. "Syntactic QR in Wh-in-Situ Languages." *Lingua* 99 (1): 21–36.

\*20 「傾向」という言葉には意図がある。[上山 2012, 232, (41)] の例を除いて、一般的な環境では、[丹羽 1992] が指摘するように、「だけ」のスキープの取り方は傾向的なものでしかない。